



1 保津川の歴史と現在の試練

亀岡市を流れる保津川は、京都府南丹市に端を発し、亀岡から嵐山を経て大阪湾に流れ込む一級河川桂川の愛称で、亀岡最大の観光産業である「保津川下り」の名で国内外に知られています。桂川は、「保津川」の他に「大堰川」などとも呼ばれ、地域それぞれの呼び名で昔から地元の人々に親しまれてきました。

保津川は、かつて丹波と都とを結び、主に丹波の豊富な木材を供給しており、その歴史は奈良時代まで遡るといわれています。しかし、大変な急流と巨岩がある難所としても知られており、それを京都の豪商である角倉了以が徳川家康から許可を得て開削したことにより、物流の大動脈として開花しました。この水運の歴史を今に伝えるのが「保津川下り」です。「保津川下り」は急峻な山と急流、大変美しい自然を満喫し、運が良ければ野生動物の姿を見ることがもできる大変魅力的な観光地です。

京都府の調査¹⁾によると、保津川下りの観光客は年間約20万人を超え、保津峡に沿って走るトロッコ列車と合わせて、100万人以上の観光客が訪れています。

ところが、川の流れとともに連綿と続く歴史の中で、保津川は近年大きな

試練に直面しています。保津峡の美しく澄んだ河川が濁り、そこかしこにペットボトルなどのごみが散乱するようになりました(写真1)。

そのような状況に強い危機感を抱いた保津川下りの若手船頭達が、保津峡内のごみの清掃を行うようになり、保津川下りを運営する保津川遊船企業組合内に「エコグリーン環境対策委員会」が発足しました。委員会では、船頭自身による清掃のみならず、市民・企業・行政とも協働で活発な取り組みをすすめています。しかし、今でも大水や台風の後には大量のごみの流入が続いています。

なぜ、このように美しい河川や渓谷にごみが絶えないのでしょうか。

2 遠くて近い「漂着ごみ」

これはいわゆる「海ごみ」の問題の一端です。近年、急速に深刻化する海ごみの大半は陸域から河川を通じて流れ出した生活ごみであることが多くの研究から明らかになっています。この問題は人々にとって「遠くて近い」2つの問題を抱えています。

3 世界で問題化する「漂着ごみ」

現在、世界中で問題が深刻化している「漂着ごみ」は、そのごみが発生源にとどまらずやがて海へ流れ出し、多



写真1 保津峡へ流れ着くごみ

くのごみが海流に乗って海中を漂い、海底に沈み、あるいは海岸や島に流れ着きます。このようなごみは総じて「海ごみ」と呼ばれ、主なごみの発生源である内陸河川流域の住民には「目には見えない」「遠くの問題」と化すのです。また、もう一つの見えない問題は、ごみが漂流する過程で小さく、細かくどんどん姿を変えていくということです。これは近年「マイクロプラスチック」問題として大きく取り扱われています。マイクロプラスチックは魚の多くが誤飲しているほどの、本当に目には見えない大きさのプラスチックです。詳しくはこの後の記事(p.78)をご覧ください。

4 海ごみの真の発生源

近年の調査によると、日本沿岸に漂着する海岸漂着ごみの大半が国内の内陸河川由来のごみであるといわれています。

その発生源はさまざまですが、例えば各家庭の側溝に何気なく落ちたペットボトルやレジ袋、収集されなかった

食料品トレーなどのとても身近なごみ(表1)が、まず、近くの支流に流れます。これは不法投棄などのごみ問題に比べるとほんの些細なことのように思えます。しかし、これらのごみが自然へ与える影響は甚大です。保津川に

表1 保津峡調査における回収ごみの割合(単位:個)

発泡スチロールの破片	365
食品の発泡スチロール容器	116
飲料ペットボトル	65
その他	62
硬いプラスチックの破片	58
その他生活用品	32
食品のポリ袋	28
ポリ袋・シートの破片	23
食品のプラスチック容器	22
ボール	19
飲料びん	15
プラスチック・ボトル(洗剤・シャンプーなど)	15
飲料缶	12
ガラスやせともの破片	7
飲料紙パック	5

※こども海ごみ探偵団調査結果より作成

住む野生動物の誤飲や誤食が心配されるだけではなく、海洋のプラスチック汚染に直結する問題でもあります。さらに、観光地でもある保津川や下流の嵐山においては、深刻な景観の悪化を招くなど地域経済に与える影響も無視できない問題となってきています。

5 川と海つながり共創（みんなで作ろう）プロジェクトの発足

このような海や川のごみ問題は、日本だけでなく世界中で解決すべき大きな社会問題となっています。2012（平成24）年8月に内陸地域では初めての開催となった、亀岡市での「第10回海ごみサミット2012亀岡保津川会議」で、「亀岡保津川宣言」および「川のごみや海のごみをともに考える京都流域宣言」が宣言されました。これを具現化し、海岸漂着ごみ削減に向けた内陸地での発生源対策やごみの発生抑制について、協働を通じた市民参加による恒久的なごみ散乱防止への仕組みづくりなどを推進するために、亀岡市では市民（地域自治会、環境NPO等）、事業者（保津川遊船企業組合、JR西日本、漁業協同組合、農業協同組合、観光事業者等）、行政等（亀岡市、京都



写真2 急峻な保津峡でのごみ調査

表2 淀川調査における回収ごみの割合（単位：個）

ポリ袋・シートの破片	68
発泡スチロールの破片	55
食品のポリ袋	49
その他	34
飲料ペットボトル	26
食品の発泡スチロール容器	23
その他生活用品	22
ガラスやせともの破片	22
花火	21
食品のプラスチック容器	18
タバコの吸殻・フィルター	18
ボール	13
その他のプラスチックのふた・キャップ	12
硬いプラスチックの破片	11
飲料紙パック	9

※こども海ごみ探偵団調査結果より作成

府、外郭団体等）市内のさまざまな団体で「川と海つながり共創（みんなで作ろう）プロジェクト（以下、「川～海PJ」）を発足しました。

川～海PJでは、環境教育や清掃活動を通じて内陸部からの海ごみの発生抑制に取り組んでいます。

6 こども海ごみ探偵団の取り組み

川～海PJでは、市内の小中学生やその保護者を対象に「こども海ごみ探偵団」事業を行っています。この事業はその名のとおりに、ごみの回収および調査をすることで海ごみ問題への関心を家族で高め、地域や家庭でのごみの発生抑制へつなげてもらうことを目指しています。

2016（平成28）年度は、①桂川の源流域（片波川源流域：京都市右京区京

北地区)、②保津川中流域(保津峡:亀岡市~京都市嵐山)、③河口域(淀川河口部:大阪市東住吉区海老江)、そしてごみが海流にのって流れ着く④海域(成ヶ島:兵庫県洲本市由良町)でごみ調査に乗り出しました[†]。まず、保津峡調査では、参加者は保津川下りに乗船し、保津峡の豊かな自然を堪能しつつ、急峻な岩場に降り立ち、多数のごみを回収しました(写真2)。

また、淀川海老江調査では、ごみの様相が変わり、レジ袋やシートの破片、食品包装類が多くなりました(表2)。調査日はお盆明けであったこともあり、精霊送りの供え物も大変多かったことが印象的でした^{††}。

一方、片波川源流域調査では逆にごみのない美しい自然の中を散策しました^{†††}。川の本来あるべき姿に参加者一同は感動しました。

7 子ども海ごみ探偵団から世界に問いかける

ごみ調査の取り組みの他に、各種講演会への出席や「近畿こどもの水辺交流会」などに出席し、他地域で同様の活動を行う子どもたちとの交流を行っています。また、2016(平成28)年11月にインドネシアのバリ島で開催された「第16回世界湖沼会議」において、こ

ども海ごみ探偵団に参加した子どもたちが、私たち自身が未来にむけてできること、そして海ごみの問題に真剣に向き合うことの重要性を世界に向けて発信しました。

8 ごみを出さないために

海ごみはいまや世界的な問題で、早急な対策が求められています。一連の調査の結果からも明らかなように、発生源は私たちの日常生活の一コマの中に隠れています。まずはごみを「出さない」「出させない」仕組みをつくる必要があります。例えば、世界各国で導入されているペットボトルのデポジット制の導入や、レジ袋の有料化や廃止などに国や地方が一体となって取り組むことを訴えていきたいと思えます。

ご興味をもっていただけた方は、是非、下記ホームページをご高覧ください。亀岡市:川と海つながり共創(みんなでつくろう)プロジェクト活動中

<http://www.city.kameoka.kyoto.jp/kankyohozen/kurashi/kurashi/shizen/hyouchakugomi/tanteidanhodugawa.html>

参考文献

- 1) 京都府:平成25年観光入込客数及び観光消費額について、京都の魅力、京都府ホームページ <http://www.pref.kyoto.jp/kanko/h25-kankoirikomi.html> (閲覧日:2016年11月12日)

[†] 海域調査は2016(平成28)年12月実施

^{††} 食品トレイや発泡スチロールを盆船に仕立てたものが目立った

^{†††} 当地区は京都府自然環境保全地域、特別地区・野生動植物保護地区、天然記念物指定地域に指定され伏条台杉の巨木などが群生する